

# 「異質性(Heterogenität)」をめぐる 教授学論議の動向と課題

田中紀子

(2012年10月2日受理)

Richtung und Aufgaben von der didaktischer Diskussion  
um die „Heterogenität“ in Deutschland

Noriko Tanaka

**Zusammenfassung:** Seit den internationalen Schulleistungsstudien PISA wurde die „Heterogenität“ des Schulalltag in Deutschland wieder thematisiert. Es ist auch in Japan sinnvoll zu fragen, dass welche didaktische Theorien hat den gemeinsamer Unterricht in heterogenen Gruppen ermöglicht; daher würde nach Richtung und Aufgaben von der didaktischer Diskussion um die „Heterogenität“ in Deutschland. Erstens beschreiben den Atlas von dem didaktischen Diskussion um die „Heterogenität“ erforschen. Zweitens wird Mölichkeit des gemeinsamer Unterricht in heterogenen Gruppen zeigen, wenn die Betrachtung von Integration Pädagogik berufen werden. Letzt wird Notwendigkeit der didaktische Kompetenzen der Lehrer und Lehrerin für Umgang mit Heterogenität gezeigt.

Stichwörter: Heterogenität, Integration Pädagogik, Allgemeine Didaktik, Gemeinsamer Unterricht

キーワード: 異質性, インテグレーション教育学, 一般教授学, 共同的な授業

## はじめに

「異質性 (Heterogenität)」は、ドイツの教育学論議における一つのキーワードである。日本の教育学論議では、あまり馴染みのない言葉であるが、ドイツで「異質性」という言葉を使って論じられる論題の多くは、わが国でも検討されるべき課題と共通している。

例えば、インクルージョン<sup>1)</sup>への対応、「気になる子」や「困っている子」という表現で取り上げられる子どもへの対応<sup>2)</sup>、学習集団の中の学習能力の差への対応といったわが国で取り沙汰される教育の課題は、ドイツ教育学における「異質性」論議の内容そのものである。

もちろん、ドイツと日本の教育の課題を安易に結びつけられない側面があることも確かである。歴史的背景からドイツ国民は、過度な「同質性」の追求と「異

質性」の排除に敏感である。移民の流入<sup>3)</sup>、東西ドイツの統一、ヨーロッパ統合などによって、「異質性」とどのように付き合うかという課題に直面してきた経緯もある。

このように、歴史的、社会的背景については異なる側面を持つものの、ドイツで「異質性」という言葉を用いて検討されている、多様な子どもたちがどのようにしてともに学びうるのかという問いに対するドイツ教授学の向き合い方は、わが国の教育実践のあり方を考察するうえでも示唆に富んでいる。障害を持つ子どもと障害のない子ども、あるいは成績や生活背景、学習のモチベーション等々が異なる子どもたちが共に学ぶ授業の可能性と課題を探る手がかりとしたい。

そのための足がかりとして本稿では、ドイツにおける「異質性」をめぐる教授学論議の動向を整理し、その課題を析出する。

まず、「異質性」をめぐる教授学論議の動向を捉えるために、ドイツの教育雑誌3誌を対象として「異質性」に関する論文の掲載状況を整理する。調査の対象とした雑誌は、2000年から2010年までに発刊された「Zeitschrift für Pädagogik」誌、「Pädagogik」誌、「Zeitschrift für Heilpädagogik」誌である。「異質性」と関連の深いキーワード（インテグレーション、移民、多様性など）にも着目して、「異質性」という言葉を使って論じたものを取り上げ、雑誌毎の傾向を整理する。

次に、文献を参照して、インテグレーション教育学と一般教授学という2つの領域における「異質性」の論じられ方の一端を示す。

これらの整理を通して、「異質性」をめぐる教授学論議の地図を描き、その課題を析出したい。

## 1 教育における「異質性」関連の文献の動向—2000年～2010年を中心に

教育における「異質性」関連のドイツ語文献については、2000年から2010年の間だけでも多数の書籍が出版されており、教育を考える上で「異質性」が一つのキーワードとなっていることが分かる<sup>4)</sup>。

以下では、ドイツの教育雑誌3誌に掲載されている「異質性」に関する論文について、2000年から2010年までの掲載の頻度や「異質性」がどのようなキーワードとともに論じられているのかを整理する。

### (1) „Zeitschrift für Pädagogik”誌

„Zeitschrift für Pädagogik”誌<sup>5)</sup>（以降、「Z.f.Päd.”誌と略記）は、ドイツ教育学会の機関誌である。同誌に掲載されている論文の分析を通して、ドイツ教育学会における「異質性」論議の在りようを考察したい。

2000年から2010年の間に掲載された論文のうち「異質性（Heterogenität）」を主要なテーマとして取りあげているものは、2004年のウェンニング（Wenning, N.）の論文「教育科学の新たな基調としての異質性？—平等と差異の考慮について」<sup>6)</sup>、そして2007年のフルストナウ（Fürstenau, S.）の論文「民族の異質性の文脈における教育スタンダード—イギリスの経験とドイツの視点」<sup>7)</sup>の2つである。

このうち、2004年のウェンニングの論文では、PISAとIGLU<sup>8)</sup>以降、学校と教師が異質性の取り扱いに関して学ぶ必要性が高まっていると述べている。近代教育制度の中で、これまで暗黙の前提（同質化や異質化の尺度）とされてきたものを明らかにすることで、「どのような差別が、個々の、そして／あるいは集団特有の相違点に存在するのかを分析」<sup>9)</sup>している。

各号で設定される主要テーマについては、「異質性」そのものを取りあげた号は見られなかった。他方で、「異質性」とつながりのあるキーワードに着目してみると、「移民（Migration）」を背景に持つ人の教育に関して2004年6号の「カリキュラムにおける異文化性と国際性」<sup>10)</sup>、2010年の別冊55号「移民、アイデンティティ、言語と教育の成果」などで主要テーマが組み立てられており、それ以外の号の一般論文の中にも移民を背景に持つ人の教育に関する論文が散見された。その他にも2006年の別冊51号「コンピテンシーと教師のコンピテンシー育成：養成教育と職業」のような教師教育に関する特集の中でも、「異質性」という言葉を用いながら「移民」を背景に持つ人の教育のために必要な教師の能力について論じているものがある<sup>11)</sup>。

「インテグレーション（Integration）」や「障害を持つ子ども（Behindert Kinder）」に関する論題も「異質性」と関連性の強いものであるが、2000年～2010年の「Z.f.Päd.”誌では「特殊教育学（Sonderpädagogik）」の論文自体が少なく、それらのキーワードと関わって「異質性」を論じているものは見当たらなかった。

以上のように、「Z.f.Päd.”誌では、「異質性」を主題とした論文の掲載数は少ない。その一方で、「移民」を背景に持つ人の教育が数年おきに主要テーマとして設定され、一般論文でも掲載されるなど、「異質性」論議と関連の強い「移民」の問題に高い関心が集まっている。「移民」に関する論議の中で「異質性」に触れながら考察される傾向があることは、「Z.f.Päd.”誌における「異質性」論議の特徴といえる。

### (2) „Pädagogik”誌

„Pädagogik”誌<sup>12)</sup>は、授業実践の省察と改良に関心を寄せ「制度的方向だけでなく、学校実践が『しいられる』学校教育学的な議論」を反映した雑誌である<sup>13)</sup>。

教育学雑誌の中でも、「Pädagogik”誌は、「異質性」に関する特集の設定、および論文や記事の掲載頻度が高いといえることができる。2000年から2010年の推移については、2003年に7本<sup>14)</sup>、2004年に2本<sup>15)</sup>、2006年に4本<sup>16)</sup>、2007年に4本<sup>17)</sup>、2009年に1本<sup>18)</sup>、2010年に2本<sup>19)</sup>とコンスタントに掲載されている。

特に、「異質性」がテーマとして取りあげられた号を中心に整理すると、2000年から2010年までの間に2度テーマ化されている。2003年9月号の「異質性と分化（Heterogenität und Differenzierung）」、2007年12月号の「異質性の取り扱い（Umgang mit Heterogenität）」である。さらに、2006年7-8月号「ゲザムトシューレ—異質性の取り扱い（Gesamtschule - Umgang mit Heterogenität）」では、ゲザムトシューレを中心的なテーマとしながらも、「異質性」という観点からゲザ

ムトシューレの実践を考察している。

2003年9月号の巻頭言では、「異質性」をテーマ化する理由について次のように述べられている。

「PISAの結果からの診断は、この中心テーマの採用理由であり、(PISAの)結果への疑問と、異質性の取り扱いにおける異なる学習形式に関する提案のきっかけである。/第2に、教師たちの経験がこの号のきっかけである。すなわち、学習グループの同質化を志向する学校と授業の文化によって、異質性のすべての形式が重荷にさせられるのである。教師たちは、妨害と学習嫌いが多くの場合には、適切な形で個性と異質性に応じることの欠如の象徴であることに気づいている。したがって、異なる学習形式のための示唆を追求する」<sup>20)</sup>。

つまり、PISAショックとともに教師たちの経験に基づく認識が「異質性」をテーマとして取りあげる理由であった。この2003年の特集に見られる傾向は、他国の動向の報告やドイツにおける「異質性」の現状を概観したもの、または「異質性」の問題を分化の理論の研究に置きかえて論じたものが掲載されていることである。これらは、「異質性」の観点や課題を探るための抽象的な議論として読むことができる。

一方、2007年12月号の「異質性の取り扱い」では、巻頭言で「私たちは生徒たちを彼らの相違の中でより公平に扱いたいならば、授業を新たに展開しなければならない」<sup>21)</sup>と述べている。この特集号では、授業、学校制度、教師教育の変革が論じられており、「異質性」がより具体的な教育政策的な議論、あるいは学校づくりや授業づくり、そして教師の意識や授業理論の変革と関連づけて論じられている。

### (3) „Zeitschrift für Heilpädagogik“誌

„Zeitschrift für Heilpädagogik“誌は、特殊教育学連盟 (Verband Sonderpädagogik e. V.) の機関誌である。

雑誌の性格上、本稿で取り上げた他の2誌に比べて、インテグレーションやインクルージョンに関する論文が取りあげられている回数は多く、それらの論文の中で「異質性」という言葉を用いているものが散見された<sup>22)</sup>。その他にも、PISAの分析に基づいて学校制度改革について論じる文脈の中で「異質性」に触れたもの<sup>23)</sup>、そして共同的な授業に関する論文の中で「異質性」について触れているもの<sup>24)</sup>が見られた。

他の2誌と比べると、「異質性」に関する記述が総数としては少なかったが、この理由として治療教育学という限定的な領域の論文を掲載している雑誌であることや、雑誌への掲載論文数自体も他の2誌より限られていることが考えられる。

## 2 インテグレーション教育学の視点からの「異質性」へのまなざし—グラウマン (Graumann, O.)を手がかりに

「異質性」をめぐる教授学論議において、重要な役割を担っているのがインテグレーション教育学である。世界的なインクルージョンの潮流の中で、障害を持つ子どもと障害を持たない子どもがともに学ぶ意義と可能性の探求は、重要なキーワードとなっている。

インテグレーション教育学は、障害を持つ子どもと持たない子どもの共同的な授業の可能性を積極的に検討している領域の一つであり、障害のある人を学校的、そして社会的に分離しないことを目的とし、教育制度や教育実践などの既に規定された学校のあり方に変化をもたらし<sup>25)</sup>ような教育学領域とされる。インテグレーション教育学は、できるだけ大きな「同質性」のある社会形式を求めて成績基準による選別を行うような従来の教育学に対して批判的な立場を取り、できるだけ大きな「異質性」のある社会形式のあり方を提示し、すべての子どもが一緒に学び、協力するような教授学的原理を追求している<sup>26)</sup>。

このようなインテグレーション教育学においては、「すべての子どものための学校」を実現することが目指される<sup>27)</sup>。そのために、障害の有無を超えて、単に教育の場の統合を目指すのではなく、障害を持つ子どもと持たない子どもがともに学ぶことが出来る学習内容や学習方法などについても検討している。

すなわち、「どのような教授学的な概念が、共同的な授業の中で、高い能力、平均的な能力、もしくは学習遅滞 (Lernbehinderte) の生徒たちに対応することができるのかと問うこと」<sup>28)</sup>がインテグレーション教育学の主要な関心といえる。異質な学習グループにおいて、学習者の能力に応じた個別的な学習を推進するだけではなく、「共同的な」授業を行うための教授理論を求めているのである。

例えば、ドイツの中でもインテグレーションの先進的な取り組みがあるニーダーザクセン州のインテグレーション委員会で副議長を務めており、ヒルデスハイム大学で学校教育学を教えるグラウマンは、具体的な事例を示しながら、障害を持つ子どもと持たない子どもの共同的な授業の可能性を積極的に論じている。

以下の事例は、教師としてグラウマンが同僚の女性教師と共に受け持ったグルントシューレのインテグレーション学級における授業実践である<sup>29)</sup>。事例に登場する少年であるマルティン (Martin) は、ダウン症の診断を受けており、ユリアン (Julian) は高い能力を持つ子どもと診断されている<sup>30)</sup>。

「午前中に、どんなときに水が氷へと凍り、どうして水道水は冷たくて、私たちはどんな温度によって水を温かいと感じ、どんな冷たさによってそうなのかなどの質問をしていた。机の上には、氷、氷水、水道水、温かい水の入ったいくつもの容器が置かれている。子どもたちは温度計で温度をはかり比べ、表に書き表している。/ダウン症の男の子であるマルティンは、魅了されていた。彼は、氷水に手を突っ込み、さらに温かい水に手を突っ込んだ。彼はくり返し、ちがう容器に手を沈めた。くり返し、そしてとても集中して彼は、肌で変化する温度の作用を調べた。彼は熱心に、長い間ずっと席に座って温度を記録する他の子に対して、例えば彼は『冷たくなった』と叫ぶことで伝えた。高い能力をもつ男の子であるユリアンは、再び立ちあがり、一彼は好奇心を強く生じさせられた一水に手を突っ込んだ。彼は温度計で温度を調べ、マルティンの観察結果を証明した。マルティンはそれを見て、興味を持った温度計を観察した。いまや、みんな一層に触って調べたがる一多くの手によって水は自然と温かくなる。マルティンもまた、引き続き確かめていた。さて、ユリアンはあるアイデアに近づいていた。彼は、どんなふうに氷水が急速に暖まるのか一水に手がつけられた時、あるいはそれをただ温かい空間においていた時一を発見したかった。彼は、マルティンの協力のもとの、実験にふさわしい容器を準備した」<sup>31)</sup>。

この事例において、当初、子どもたちは机の上に置かれた氷、氷水、水道水、温水の温度をそれぞれ温度計で測って紙に記入していたことがわかる。このことをグラウマンは、例えばユリアンについての論述によって、次のように述べている。

「……ユリアンは、温度を実際に感じることを必要としていない。しかし、温度計を使って活動していたとき、彼はすでに危険をおかしていた。それは、感覚的な経験をすべて排除させていること、そして面白い観察をしていなかったことである」<sup>32)</sup>。

その後、マルティンの呼びかけを受けて、子どもたちは次第に自分の手で確かめることに興味を示す。マルティンも、他の子どもの様子に触発されて温度計に興味をもった。ユリアンは、手で触ってみたことで、新しい疑問が浮かび、学習意欲が駆り立てられた。このように、グラウマンの事例からは、子どもたちが相互に思考を刺激し合うという点で異質な学習グループでの授業の可能性が指摘され得るのである。

グラウマンは、子どもたちの発達水準や行動の差異を、お互いの認識を刺激し合うものとしてポジティブに位置づけている。彼女が主張するように、学習者同士の相互作用を学習の中に位置づけ、生かすことが出

来れば、授業における「異質性」は学習を促進する働きを持つものになる。

すなわち、「異質性」を授業の中で生かすためには、授業が学習者同士の差異によって高められるような「共同的な」ものでなければならないといえる。

グラウマンにとって、授業の「共同性」は、「異質性」を支える重要な柱であり、インテグレーション教育学は、このようにできるだけ大きな「異質性」と、「共同的な」授業を追求している。

### 3 一般教授学の視点からの「異質性」へのまなざし—ショインプフルーク (Scheunpflug, A.)を手がかりに

「異質なグループのための学習アレンジメント (Lernarrangement) の創造は、教育学的挑戦である」<sup>33)</sup>。

このショインプフルークの言葉は、「異質性」の取り扱いに対する一般教授学の立場を端的に表している。すなわち、授業における「異質性」の取り扱いという課題は、旧来からの一般教授学のあり方を問い直し、新たな一般教授学研究のあり方を創造することにつながる「挑戦」である。

彼女によれば、一般教授学が重視しているのは授業のための一般的な規準やモデルを提示することである。このような一般的な規準やモデルを提示するという一般教授学の特質は、差異や多様性あるいは個別性の顧慮を強調する「異質性」への対応という課題に直面している。

というのも一般教授学は、一般化された教授学的なモデルを提示するために、教授の対象となる集団を「同質性」の高い集団として仮定してきたという背景がある。ショインプフルークは、この暗黙の前提が、一般教授学的な理論の広がりとともに教師に対して「同質性」の高い学習集団を期待する志向性を浸透させたことさえ述べている<sup>34)</sup>。

このような「同質性」の期待は、教育的平等の思想とも関連している。コメニウスに象徴される「すべての人のため」の教育という思想と就学義務の導入などの学校制度の発展は、「すべての人間は神の前で等しい」という前提を持ち、すべての人間の平等な取り扱いを志向することによって展開された<sup>35)</sup>。

一方で、学校制度の発展は、個々の学習結果によってさまざまな個性を発達させたいという要求にもつながる。階級学校から成績学校への転換が生じ、能力主義が民主的な社会における権利として定着する中で、学校は平等と差異の2つの原理を抱えることとなる。

これに対してショインプフルークは、平等と差異の

表1 授業における平等と差異のバランスの次元<sup>36)</sup>

	平等	差異
内容事柄の次元	授業への要求 — 就学の義務 — 教育スタンダード — 民主的な価値合意	— 学習内容と偶然性の克服を顧慮した異なる学習の条件 — 異なる個々人の学習可能性
時間－空間の次元	— 授業の事実 — 学習期間の期限を設けること	— 学習アレンジメントの中の個別的学习 — 方法の多様性 — 個人的な学習を可能にする課題の開発
人間社会の次元	— 出席者の下での教育 (Erziehung unter Anwesenden) — 人類学上の普遍性 — 社会性の要求	— 内容のさまざまな個別理解 (Biografien Zugang) を可能にするような授業 — さまざまな才能 — 学級の中での個性の開発 (Ausprägung)

バランスは社会的な次元を顧慮して示されると主張して、「内容事柄の次元」、「時間－空間の次元」、「人間社会の次元」といった3つの次元に分けて具体的な授業への要求を考察している(表1)。

授業の内容事柄の次元においては、平等の原理によって、民主的な合意や教育内容の質保証が求められ、差異の原理によって、個々の学習の前提条件や学習可能性への配慮が求められる。時間－空間の次元においては、平等の原理によって、授業が行われることや学習の期間が求められ、差異の原理によって、個別的学习を含めた学習の内容と手順を学習者と共に計画することや授業方法の多様性が求められる。社会的な次元においては、平等の原理によって、普遍的な学習内容の習得や社会性を育てることが求められ、差異の原理によって、多様な学習過程を可能にすることやさまざまな才能を伸ばすことが求められる。

このような平等と差異の双方からの授業への要求に一般教授学が応じるためには、さまざまな状況に応用されうるような複雑な理論の構築を要する。前述のような「同質性」の高い集団を仮定したもとの一般化されたモデルの提供から脱却し、学習のさまざまな状況を顧慮した理論を提供する必要があるのである。

このことは、教師に対する専門的で教授学的なコンピテンツの要求もまた生じさせる。具体的には、教師はさまざまな「異質性」を感知し、対応できる必要がある。複雑化した一般教授学理論を応用しながら生徒たちの「個人的でさまざまな接続可能性」に開かれた授業をつくる必要がある<sup>37)</sup>。一般化された教授学的なモデルを「適用」するのではなく、文字通り「アレンジメント」する能力が求められているといえる。すなわち「異質性」への着目によって、教師の教授学的な専門性の要請、そして教授学的な理論の複雑化につながるような発展が生じるのである。

以上のように、一般教授学において「異質な」グループのための「一般的な」授業の理論を提示するという取り組みは、まさに「挑戦」なのである。

## おわりに

「異質性」というキーワードは、ドイツにおいて、教育制度改革や移民を背景に持つ人の教育、あるいはインテグレーションの文脈等々、さまざまな教育的課題に関する論議の中に登場する。さらに、「何が異質か？」という尺度も多様に設定できるため、「異質性」が何であるかを定義することは困難である。

しかしながら少なくとも、「異質性」という言葉は、「同質性」との対比の中で意識的に用いられているといえることができるだろう。本稿で参照した文献においてもそうであったように、「異質性」という言葉を使って論じられる内容には、「同質性」追求への批判的省察の視点が含まれている。ドイツの歴史的、社会的背景を踏まえると、「同質性」の追求を批判的に捉えざるを得ない側面があり、「異質性」を排除するのではなく、「異質性」とどのように向き合っていくのが模索されている。

「異質性」との向き合い方に関して、インテグレーション教育学の視点から「異質性」を授業に生かす可能性を提供しているのがグラウマンである。グラウマンの事例は、共同的な授業の中では「異質性」が学習を促進しうることを示している。

今後は、さらに具体的に、どのようなカリキュラムや授業構成、学級づくりのもとで「異質性」が学習を促進することができるのかという方法論や教授理論を明らかにしていく必要がある。

他方で「異質性」への対応は、一般教授学的な理論の複雑化を招くということが、ショインプフルークの

主張であった。教授学的な理論の複雑化と同時に、「異質性」の取り扱いのための教師の教授学的な能力への要求も生じる。

「異質性」の取り扱いのために、教師はどのような専門的な能力を、どのようにして身につけていくことができるのかという点についても、今後具体的に示されていく必要がある。

## 【註】

- 1) ドイツでは、インテグレーション (Integration) という言葉を用いた文献が現在でも多く見られるが、徐々にインクルージョン (Inklusion) という言葉を用いた論述も増えている。論者や文脈によっては、インクルージョンの概念が反映されていても「インテグレーション」という言葉で表現している場合がある。
- 2) ドイツでは、教育上不利な子ども、学習モチベーション、学習妨害の問題として議論されている。
- 3) ドイツでは、1950年代から移民の流入が続き、2005年の国勢調査で人口の約2割が「移民を背景に持つ人 (Person mit Migrationshintergrund)」であることが明らかとなった (佐藤成基『「統合の国」ドイツの統合論争—変化するドイツ社会の自己理解』, 法政大学社会学部学会『社会志林』第54号 (4), 2011年, 173~205頁参照)。佐藤に拠れば、「移民を背景に持つ人」という把握は、ドイツにおいて2005年の国勢調査から導入された。その理由は、ドイツ人であるかどうか (国籍保有) の差異が「もはや根本的区分ではなくなっている」(同上論文, 174頁) ことにある。また、2005年の「移民法」発効、2006年から始まった「統合サミット」、2007年の「国家統合計画」など、2000年代には立て続けに統合に向けた政策が実施されている。
- 4) 例えば、2008年版の『ドイツ連邦共和国における教育制度—構造と発展の概観』では、第7章「異質性と共同的な教育の間のグルントシューレ」として取り上げられている (Cortina, K. S./ Baumert, J./ Leschinsky, A./ Mayer, K. U./ Trommer, L. (Hg.): Das Bildungswesen in der Bundesrepublik Deutschland. Der neue Bericht des Max-Planck-Instituts für Bildungsforschung. Rowohlt Taschenbuch Verlag, Hmburg, 2008. 1994年版は、マックス・プランク教育研究所研究者グループ著、天野正治・木戸裕・長島啓監訳『ドイツの教育のすべて』東信堂、2006年として翻訳されている)。
- 5) „Z.f.Päd.“誌では各号ごとに主要テーマが設定さ

れ、教育学論文、報告記事、書評、教育学の大学教授資格取得者と博士学位授与者一覧、図書紹介を主な内容として隔月で刊行され、その他に特定のテーマに関する論文を集めた別冊誌も刊行されている。

- 6) Wenning, N.: Heterogenität als neue Leitidee der Erziehungswissenschaft? Zur Berücksichtigung von Gleichheit und Verschiedenheit. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 50. Jahrgang, Heft 4, 2004, Beltz Verlag, Weinheim, S.565-582.
- 7) Fürstenau, S.: Bildungsstandards im Kontext ethnischer Heterogenität. Erfahrungen aus England und Perspektiven in Deutschland. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 53. Jahrgang, Heft 1, 2007, Beltz Verlag, Weinheim, S.16-21.
- 8) Internationale Grundschul- Lese- Untersuchung.
- 9) Wenning, a. a. O., S.565. ウェンニングはこの論文の中で、諸文化間の教育学、インテグレーション教育学、フェミニズム教育学といった3つの専門分野を特に取り上げている。この考察の枠組みは、「異質性」に関する多くの研究論文で引用されているプレングル (Prenzel, A.) の『多様性の教育学—諸文化間の、フェミニズムの、そしてインテグレーションの教育学における差異と平等』 (Prenzel, A.: *Pädagogik der Vielfalt. Verschiedenheit und Gleichberechtigung in Interkultureller, Feministischer und Integrativer Pädagogik*. Vs Verlag, Wiesbaden, 1993, <sup>3</sup>2006) に拠るものである。
- 10) このテーマに関して、ゴゴーリンとシュヴァルツの論文「言語的・文化的に異なる学級における『数学言語』」 (Gogolin, I./ Schwarz, I.: „Mathematische Literalität“ in sprachlich-kulturell heterogenen Schulklassen. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 50. Jahrgang, Heft 6, 2004, Beltz Verlag, Weinheim, S.835-848.) といった、移民の背景を持つ子どもが在る学級の現状分析とその課題について述べた論文が5本掲載されている。そのうち3本の論文 (先にあげた論文の他に、Jungmann, W./ Triantafillou, F.: Interkulturelle und Internationale Ansätze in der Lehrerbildung. Erste Befunde einer vergleichenden Analyse zur Lehr(er)qualifikation für die Primarstufe an deutschen und griechischen Hochschule. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 50. Jahrgang, Heft 6, 2004, Beltz Verlag, Weinheim, S.849-864. および Neumann, U./ Reuter, L. R.: Interkulturelle Bildung in den Lehrplänen - neuere Entwicklung. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 50.

- Jahrgang, Heft 6, 2004, Beltz Verlag, Weinheim, S.803-817.)については「異質性」あるいは「異質な学級」という言葉を使いながら論じている。さらにこの号では、書評 (Allemann-Ghionda, C.: Martina Weber. Heterogenität im Schulalltag. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 50.Jahrgang, Heft 6, 2004, Beltz Verlag, Weinheim, S.779f.) も掲載されている。
- 11) このテーマのもとにアレマンらの論文「社会文化的そして言語的に異質な学級における観察と評価」(Allemann-Ghionda, C./ Auernheimer, G./ Grabbe, H./ Krämer, A.: Beobachtung und Beurteilung in soziokulturell und sprachlich heterogenen Klassen: die Kompetenzen der Lehrpersonen. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 51.Beiheft, 2006, Beltz Verlag, Weinheim, S.250-266.) や教師の専門性との関連の中で「異質性」について触れているもの (Edelmann, D.: Pädagogische Professionalität im transnationalen sozialen Raum. Eine Studie über Sichtweisen und Erfahrungen von Primarlehrpersonen in Bezug auf die kulturelle Heterogenität ihrer Schulklasse. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. 51. Beiheft, 2006, Beltz Verlag, Weinheim, S.235-249.) が掲載されている。
- 12) „Pädagogik“誌は、実践的情報の提供を目的として月に1度発行されている。ただし、7月号と8月号は合併号として2ヶ月で1冊が発行されている。その典型的な内容は、各号毎に設定された中心的なテーマに沿った論文、寄稿論文、数ヶ月間設定されるシリーズ記事、教育学の論争に関する記事、教育政策に関する記事、書評、資料や会合の日程等を記載したマガジンおよびコラム記事である。
- 13) Vgl., Bastian, J./ Gudjons, H.: Pädagogik studieren. Einführung der Herausgeber. In: Bastian, J./ Gudjons, H.(Hrsg.): *Das Pädagogik- Studium*. Beltz Verlag, Weinheim und Basel, 1993, S.14.
- 14) Vgl., Vieluf, U.: Heterogenität als Chance? Ein Vergleich der Leistungsentwicklung von Haupt- und Real- schüler(inne)n in nicht integrierten und integrierten Systemen. In: *Pädagogik*. 55.Jahrgang, Heft 3, 2003, Beltz Verlag, Weinheim, S.34-38. および von der Groeben, A.: Lernen in heterogenen Gruppen. Chance und Herausforderung. In: *Pädagogik*. 55.Jahrgang, Heft 9, 2003, Beltz Verlag, Weinheim, S.6-9. など。
- 15) Vgl., Klein-Landeck, M.: Differenzierung und Individualisierung beim offenen Arbeiten. Beispiel: Englischunterricht. In: *Pädagogik*. 56.Jahrgang, Heft 12, 2004, Beltz Verlag, Weinheim, S.30-33. など。
- 16) Vgl., Tillmann, K.J./ Wischer, B.: Serie - Bildungsforschung und Schule. Folge 3 - Heterogenität in Schule. Forschungsstand und Konsequenzen. In: *Pädagogik*. 58.Jahrgang, Heft 3, 2006, Beltz Verlag, Weinheim, S.44-48. および Skischus, G./ Waltenberg, B.: Umgang mit Heterogenität lernen. Erfahrungen mit individuellen Zugängen zu Inhalt, Leistung und Sozialem Verhalten. In: *Pädagogik*. 58.Jahrgang, Heft 7-8, 2006, Beltz Verlag, Weinheim, S.44-47. など。
- 17) Vgl., Arnz, S.: Auf dem Weg zum Gemeinschaftsschule. Über den schwierigen Versuch, die Gestaltung des Lernens in heterogenen durch Systemveränderungen anzugehen. In: *Pädagogik*. 59.Jahrgang, Heft 12, 2007, Beltz Verlag, Weinheim, S.14-17. および Kottmann, B.: Für den Umgang mit Heterogenität im Studium sensibilisieren. Das Bielefelder Projekt >>Schule für alle<<. In: *Pädagogik*. 59.Jahrgang, Heft 12, 2007, Beltz Verlag, Weinheim, S.30-33. など。
- 18) Vgl., Bönsch, M.: Methodik der Differenzierung. Ordnung und Umsetzungs- möglichkeiten von Differenzierungsformen. In: *Pädagogik*. 61.Jahrgang, Heft 9, 2009, Beltz Verlag, Weinheim, S.36-40.
- 19) Vgl., Höcker, M.: Auf einem guten Weg zur Gemeinschaftsschule. Die Trennung der Schüler überwinden- mit Heterogenität umgehen lernen. In: *Pädagogik*. 62.Jahrgang, Heft 5, 2010, Beltz Verlag, Weinheim, S.20-25. および Klippert, H.: Rezensionen— Heterogene Gruppen unterrichten. Strategien zur systematischen Lernförderung. In: *Pädagogik*. 62.Jahrgang, Heft 5, 2010, Beltz Verlag, Weinheim, S.38-42.
- 20) Bastian, J.: Heterogenität und Differenzierung. In: *Pädagogik*. 55.Jahrgang, Heft 9, 2003, Beltz Verlag, Weinheim, S.3.
- 21) Vgl., Bastian, J.: Umgang mit Heterogenität. In: *Pädagogik*. 59.Jahrgang, Heft 12, 2007, Beltz Verlag, Weinheim, S.3.
- 22) Vgl., Werning, R.: Inklusion zwischen Innovation und Überforderung. In: *Zeitschrift für Heilpädagogik*. Heft 8, 2010, Ernst Reinhardt Verlag, München, S.284-289. など。
- 23) Vgl., Schor, B. J.: Die Differenziertheit des deutschen Bildungswesens Chance oder Hemmnis? In: *Zeitschrift für Heilpädagogik*. Heft 9, 2003, Ernst Reinhardt Verlag, München, S.307-376. およ

- び Eberwein, H.: PISA und die Selektion von Kindern mit Lernschwierigkeiten. Kritik an den mangelnden Strukturellen Konsequenzen aus der OECD-Studie. In: *Zeitschrift für Heilpädagogik*. Heft 8, 2003, Ernst Reinhardt Verlag, München, S.338-342. など。
- 24) Cloerkes, G./ Markowetz, R.: Stigmatisierung und Entstigmatisierung im Gemeinsamen Unterricht. In: *Zeitschrift für Heilpädagogik*. Heft 11, 2003, Ernst Reinhardt Verlag, München, S.452-406. および Scherer, P.: Offene Lernumgebungen im Mathematikunterricht. Schwierigkeiten und Möglichkeiten lernschwacher Schülerinnen und Schüler. In: *Zeitschrift für Heilpädagogik*. Heft 8, 2007, Ernst Reinhardt Verlag, München, S.291-296. など。
- 25) プレンゲルは、インテグレーション教育学が既存の教育の状況にもたらす変化として、「グルントシューレの2人の教師たちの共同によるチーム授業、特殊学校と社会教育学、教授法、共同の保持による個別指導と分化を可能にすること、数量的評価の廃止、子どもの個別的な学習可能性を考慮した成績評価の報告書の位置づけ」などを挙げている (Prengel, a.a.O., S.140)。
- 26) Vgl., Graumann, O.: *Gemeinsamer Unterricht in heterogenen Gruppen. Von lernbehindert bis hochbegabt*. Julius Klinkhardt Verlag, Bad Heilbrunn, 2002, S.119f.
- 27) *Ebenda*, S.119.
- 28) *Ebenda*.
- 29) このインテグレーション学級は、グラウマンが同僚の教師と共に4年間受け持った。事例は、グルントシューレの4年生のものである。また、「この学級は24人の子どもたちが在籍しており、そのうち5人の子どもたちが障害を持っていた」(*ebenda*, S. 232.)。これらの記述から、グラウマンがいう「異質性」や異質な学習グループが何であるかを知る事ができる。例えば、この学級では障害の有無にかかわらず、24人の子どもたちが在籍していることが分かる。グラウマンは他にも、移民の子どもとドイツ人の子どもが分離した教育課程に選別されることや、年齢と成績によって選別する学校制度に疑問を提示していることから、幅広い「異質性」の尺度を視野に入れた異質な学習グループを想定していることが分かる。
- 30) *Ebenda*.
- 31) *Ebenda*, S.124.
- 32) *Ebenda*, S.125.
- 33) Scheunpflug, A.: Lernen in heterogenen Gruppen. Möglichkeiten einer natürlichen Differenzierung. Anmerkungen zum Thema Heterogenität aus der Sicht Allgemeiner Didaktik. In: Kiper, H./ Miller, S./ Palentien, C./ Rohlf, C.(Hrsg.): *Lernarrangements für heterogene Gruppen. Lernprozesse professionell gestalten*. Julius Klinkhardt Verlag, Bad Heilbrunn, 2008, S.66.「学習アレンジメント (Lernarrangement)」は、「授業における学習内容の配列や学習過程の構造を検討」するものとして、「学習配置」と訳されることもある (吉田茂孝・高木啓「『異質性』をめぐるドイツ教育学の動向—『個別化』との関係から」高松大学編『研究紀要』52・53巻, 2010年, 211頁参照)。Arrangementには「配置」の他に「合意」や「おぜんだて」という意味があり、教師が主に計画を立てる授業の構成 (Struktur) に比べて学習者の主体性を意識したものとみられる。このような意味合いを残すために、本稿では「学習アレンジメント」と訳した。
- 34) Vgl., Scheunpflug, a.a.O. S.66f.
- 35) Vgl., *ebenda*, S.69.
- 36) Vgl., *ebenda*, S.72.
- 37) *Ebenda*. (主任指導教員 深澤広明)